平成17年9月1日発行

第 9 号

会　　報

東北大学教育学部同窓会仙台支部

大学の今昔 －オープン・キャンパス

東北大学教育学部長・研究科長
荒 井 克 弘

例年、第1学期の講義が終了した翌週、7月の末に東北大学の「オープン・キャンパス」が催される。今年は27、28日の両日に各学部一斉に行われた。高校生たちが「東北大学」を実際に歩いて回り、その教育と研究に触れるチャンスである。5年程前までは割合ひっそりと行われていたが、年々行事も活発になり今年は大学祭のような雰囲気を醸し出していた。研究棟や講義棟の壁には多くのポスターが貼られ、学生たちの活動やら、教員紹介が一目でわかるようにレイアウトされている。入試相談や大学生活の質問に受け答えする先輩学生たちも要所、要所に控えている。

理工系の学部ではビジュアルな模擬実験が呼びものであり、文科系では高校生が関心を引きそうなテーマを厳選して模擬授業をアピールする。学部紹介あり、入試説明会ありの至れり尽くせりで、この両日は高校生たちが自由に胸張って学内を闊歩できる。遠方からの高校生たちはバスを連ね、泊まりがけでやってくる。記念講堂前の広場はさながら観光地のバスターミナルのようになり、今年の「来客数」は教育学部だけで1,500名を超えた。冷房のない暑い講堂での模擬授業、説明会のため、今年は、教育学部のネーム入りの団扇をつくり、そして冷たいウーロン茶のペットボトルを参加者全員にふるまった。

高校生たちをみながら、自分が大学を受験したころの記憶を辿ってみる。確か、大学のキャンパスにはじめて足を踏み入れたのは試験日の当日だった。その前日、緊張しながら大学正門までの道のりを噛みしめるように歩いたのを思い出す。受験雑誌の半頁か、それにも足りない程度の学部案内の記事を頼りに特に誰にも相談せず進学先を決めた。大学の研究室を訪問し、教授たちの話を聞くなどとは到底考えもしなかった。自分は、理工系の単科大学に進み、さらにその大学院に進んだ。そして現在は、教育学部の教員をしている。途中にいろいろな先生、諸先輩との出会いもあった。が、ずいぶん迂遠な回り道をしてきたようにも思う。「オープン・キャンパス」があれば、あるいは自分の進路も大きく変わっていたのかもしれない。

第 26 回
同窓会仙台支部総会のご案内

下記により仙台支部総会を開催いたします。大学当局のご好意で文科系総合研究棟の会議室をお借りすることができました。皆様お誘い合わせの上、ご出席くださいますようご案内申し上げます。

記

1．日　時　平成17年10月29日（土）
　　午後1時～5時15分
2．会　場　東北大学文科系総合研究棟一号館
　　会議室（11階）
　　TEL（022）２１７－６１０３
3．内　容
　(1)総　会　13:00～13:30（12:30　受付開始）
　(2)講　演　13:45～14:45
　　講師
　　東北福祉大学　雪江　美久教授
　　演題　『「長寿社会」のこと』
4．会　費　5,000円　当日受付で申し受けます。
5．申込み　同封のハガキでお願いいたします。
6．締切日　10月15日(土)　取消は22日(土)迄に。
＊直前にキャンセルの場合は、会費のご負担をお願いいたします。

母国の子供たちのために

小堀　恒男（25年入学）

彼女の名はポルジギン・イリナ。中国の内モンゴル自治区出身、27歳の宮城教育大学の学生である。実に純真で明るく、礼儀が正しい。

彼女は中国の大学で声楽を学んだ。その間、幾つものコンクールで優勝。2000年10月に来日して宮城教育大学の研究生となり、２年間、音楽教育を学んだ。やがて幼児教育の重要性に目覚め、同大学の幼児教育学科に入学し、一から勉学を始めた。現在２年生である。内モンゴルには幼稚園がない。帰国したら、自分の手で幼稚園を創始したい。その夢が膨らみ、改めて大学入学に踏み切ったのである。彼女はきっとそれを実現することだろう。

彼女は今、チャリティコンサートを続けている。３年前、母国のモンゴルに大寒波が襲った。零下40度の寒波に、生活の糧である羊、馬、牛などの家畜が大量死した。現金収入の途を絶たれた人々の生活は貧窮に陥った。子供たちは学用品ばかりか大事な教科書さえも買えなくなった。それを知ったイリナが行動を開始したのである。

彼女の歌唱法はモンゴル特有のオルティン・ドである。草原をわたる風のような歌声は馬頭琴の伴奏でさらに映える。時には艶やかに、時には激しいテンポでモンゴル舞踊も踊る。このコンサートを開催して得た募金を母国に送り、子供たちの教科書代にしようと考えたのである。

チャリティコンサートは仙台市、角田市、多賀城市などで開催され、すでに80万円ほどが母国に送金され、2,000人分の教科書代になっている。このことは当地の新聞に大きく報じられた。

また、次の運動を始めた。辺地で見た廃屋のような校舎で学ぶ小学生をあわれみ、校舎を建て直そうと思い立った。その資金400万円をチャリティコンサートで募金しようというのである。

彼女のひたむきな母国愛、人間愛に感動を覚えながら、いささかでも役に立てばと、陰ながら応援を続けている昨今である。

龍馬が愛した珈琲

石川　和子（31年入学）

長崎で坂本龍馬に関する史跡を訪ねた折、龍馬の銅像の傍に司馬遼太郎の「竜馬がゆく」の一節が石碑に刻まれていた。“長崎はわしの希望じゃ”“やがて日本回天の足場にもなる”と。

龍馬にとって、長崎はまさに活動の原点となった所であり、その本拠とした所が亀山社中である。幕末、西郷隆盛の援助を受けて長崎の亀山につくった貿易商社である。諸藩の浪士を20人ばかり集めて、薩長両藩のために物産、武器の売買仲介、船舶の購入周旋等を行っていたという。

この亀山社中を探してタクシーに乗ったが、途中で車は行き止まりとなり、細い道を登った坂の中腹に社中はあった。門の前に「坂本龍馬・亀山社中の跡」の石碑があり、奥に民家風の古い建物があった。この建物は、このあたりで作られていた亀山焼のあき小屋の一つで、亀山社中はそれを使っていたのだ。専門家の調査によると、何度も改装は重ねられているが幕末の建物だということだ。

この場所からは長崎港と市街地がよく見える。龍馬はここから港を眺めながら、国のあり方を模索していたのだろうか。この場に立って、当時の盛んな様子を想像することはできないが、廃墟のようなこの建物に時の流れを感じて已まない。家の前には赤いやぶ椿が咲き、南天の太い株が往時を偲ばせる。

長崎の町で、「龍馬が愛した珈琲」というものを求めた。慶応元年頃、長崎出島でしか味わえなかった珈琲をその時代の焙煎方法で忠実に再現したものだという。幕末の珈琲再現というところだ。

その幕末の珈琲を入れながら、かつて、司馬遼太郎の史実に基づいた巧みな文章にひかれて読んだ「竜馬がゆく」を思い出した。やっぱり龍馬の言葉どおり、長崎は日本回天の足場になったのだろうと思う。時代を大きく動かす本拠ともなったあの亀山の古びた建物に思いを馳せ、龍馬が愛した珈琲の香りに浸った。

感性を育む
みやぎの自然と海の魅力

今野　　健（31年入学）

大学を卒業してからのわが同期生の殆どは、小・中・高の教職に就き、全国各地に散らばった。中には、他県出身でありながら、みやぎの教職者として己が道を全うした仲間もいる。彼らをみやぎの地に留まらせたものは何だったのだろうか。

学生時代のサークル仲間や同期と会って語らう時に、山間や海辺の学校巡回のこと、初任地での生活ぶりなどが話題に上り、話に花が咲き、懐古の情が高じて尽きることがない。今年の初夏にはサークル仲間とはかり、当時巡回訪問した女川の２つの分校を訪ねた。当時船に映写機等を積んで浜から浜へ渡った所は、45年も経った今では見事に道が通じ、短時間で往来できるようになっていた。分校は既に廃校になり記念碑が建っていた。道といい家々の造りといい変貌ぶりには驚かされたが、浜からの海の眺望は変わらなかった。みやぎの海は豊かで美しい！―そこで育つ子どもたちの幸いを思わずにはいられなかった。

環境が人をつくるという。自然が、風土が、人的・物的諸要件が交錯して育ち盛りの子たちに働きかけ、鋭くその感性を磨き豊かにする。

話は明治の時代に遡る。今、私の手元に１枚の写真がある。鑑三と祐之、父・宜之（よしゆき）の内村家三代が写ったものである。鑑三は８歳から10歳の少年時代をみやぎの地で過ごした。明治２年４月から４年５月まで勤めた父の役職の関係からだが、石巻に１年、気仙沼に10か月であった。南三陸の海で漁獲された豊かで多種な魚の観察は鑑三の前半生の歩みに多大な影響を与えた。

“For Japan”を胸に刻み、札幌農学校では魚類学と水産学を専攻したのであった。水産関係の公職中の鮭や鱈・鰊・鮑等の研究成果は、当時画期的だったと言われる。とりわけ鮑の卵子の発見は、日本で最初であった。その観察眼の芽生えは、少年時代のみやぎの海の体験であった。

15 期 会（38年入学）

15期会は教育学部から教員養成課程科がなくなる前年の昭和42年に卒業しています。しかしその後同期生諸氏が一同に集う機会もなく、その後の状況について知ることもなく今日に至っております。卒業後、専攻により定期的に集いを継続しておられるところもあったようですが、最近どのような動きになっているか耳にしなくなりました。ただ、県内の教職についた同期生とはこれまで何かと出会う機会もあり声を掛け合い、あいさつをしたりして互いに元気な姿をみて安堵し励みになりました。還暦を過ぎ第二の人生に踏み出した同期生の中には、近況を話し合いたいと思われている諸氏もいるようです。

仙台支部の38年度理事を熊谷洋君と引き受けて10年ほどになりますが、支部からの連絡を出しても音信不通が増えてきました。

（文責　櫻井　正幸）

16 期 会（39年入学）

16期会、東北大学教育学部教員養成課程の最後の入学生である。「光陰矢の如し」とはよく言ったものである。卒業してから瞬く間に38年の月日が流れようとしている。当時は宮城教育大学の設立があり、教養部の時は、学内が若干混乱していたことを思い出す。

さて、16期会は５年毎に同期会を開催している。今年はその開催年度に当たる。また、多くの仲間が、還暦を迎える年であり、人生第２章の準備をする年でもある。この記念すべき年の同期会を、８月20日（土）に遠くは、京都、北海道から、80名もの同期がホテル仙台プラザに集合し開催した。タイムスリップした楽しい一時であった。いずれにせよ、同期の数が減っていくことは確実である。今まで以上に交流を深めることを大事にしたいものである。

（文責　五十嵐楯夫）

仙台支部役員名簿

（平成15. 12. 1～平成17. 11. 30）

顧　　問	藤井　黎	25多田　滋
〃	26佐々木一洋	28永野　昌一
〃	31雪江　美久	
支部長	37關口　隆	
副支部長	36阿部　琢也	36岡崎　忠
〃	39軍司　啓	
参　　与	24岩淵昌次郎	24富塚　英雄
〃	24志村　元一	29石森　幸子
〃	31枡澤　怜	32佐々木亀三郎
〃	33佐藤　健仁	
理　　事	24川井　善夫	24丸谷慶二郎
〃	25髙橋　公正	25菊池　康雄
〃	25静田　一	
〃	26池田　和夫	26三橋　亮一
〃	27岡崎　忠	27青木　敏浩
〃	28小關　幸生	28古澤　良一
〃	29青木　寛敏	29星　博
〃	30小野　正義	30小畑　博之
〃	31槇　要照	31今野　健
〃	31菅原　教雄	
〃	32久保田　明	32砂金　信男
〃	33小高　幸子	33金岡　昭房
〃	34伊藤　静男	34河野　好郎
〃	35泉　豊	35岡本　幸子
〃	36正木　競	36川村　幸安
〃	37菊田　泰丸	37小倉　英樹
〃	38熊谷　洋	38櫻井　正幸
〃	39五十嵐楯夫	39牛田　和夫
〃	41安住　裕	48桜田　博
〃	50別府　成裕	51日下　毅
〃	52吉川　邦彦	54南条　一之
〃	57川上　芳夫	H4吉植　庄栄
監　　事	25佐藤　寿郎	48宮腰　英一
大学関係理事	瓦熊井　正之	52渡部　信一
理事事務局	35伊藤　昭	39大浪　榮一
会　　計	37佐藤　勝美	
〃	35阿部　孝子	37佐藤　勝子

事務局だより

会員の皆様には、日ごろ多大なるご協力をいただき感謝申し上げます。

下記のように委員会を構成し、それぞれ活動を展開しております。

会則検討委員会

委員長　31枡澤　怜　副委員長　31今野　健
委　員　25静田　一　28古澤　良一
34一条　紀久　37菊田　泰丸

名簿作成委員会

委員長　33金岡　昭房　副委員長　35泉　豊
委　員　25髙橋　公正　29青木　寛敏
31菅原　教雄　35泉　豊

会報発行委員会

委員長　25菊池　康雄　副委員長　32佐々木亀三男
委　員　26池田　和夫　27青木　敏浩
32久保田　明　39牛田　和夫

会計委員会

委員長　29石森　幸子　副委員長　37佐藤　勝美
委　員　37佐藤　勝子　35阿部　孝子

東北大学創立百周年記念事業推進実行委員会（仙台支部関係）

実行副委員長　37關口　隆
常任実行委員　25多田　滋
推進実行委員オピニオンリーダー
25多田　滋　25髙橋　公正
27青木　敏浩　28永野　昌一
28小關　幸生　31枡澤　怜
37關口　隆
推進実行委員　28木村　力雄　30小金澤紀光
33佐藤　健仁　36正木　競
39松田　尚嗣　39大浪　榮一

○会報９号をお届けいたします。ご多用の中、ご執筆いただきました皆様に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

○会報につきまして、皆様方からのご意見、ご希望、ご寄稿等を下記事務局（連絡先）にお寄せいただければ幸いに存じます。

事務局（連絡先）

〒982-0816　仙台市太白区山田本町20－10
伊藤　昭　TEL 244－1830
〒981-3215　仙台市泉区北中山１－３－３
大浪　榮一　TEL 376－6764